

# 人間発見

医師として壁にぶつかったとき支えられた言葉がある。200年も前の、英国の詩人の言葉だ。

精神科医になって数年過ぎ、無力感を覚えることがありました。思いつく限りの治療しても、必ずしもうまくいくとは限りません。よくなったと思っていた患者さんが、しばらくすると再入院することもあります。そんなとき海外の医学論文で「ネガティブ・ケイ・パビリティ」

という言葉を知りました。直訳すると「負の力」。答えを出す力ではなく、どうにも答えが出ない事態に耐える力のことです。急いで安易な結論を出さずとせず不確実さのなかにいることができる能力ともいえます。

もともとは19世紀の英国の詩人キーツが、文学者の資質として使った言葉でした。それが約150年後、英国の精神科医ヒオンによって再び光をあてられました。この症状なら病名はこ

## 書き続け、診続ける ⑤

作家・精神科医 木蓬生さん

れ、治療法はこれ……。理論に患者を当てはめるような、マニュアル化した治療に異を唱えたものともいえます。

理解することができません。そう思えるようになったからです。ギャンブル依存症に、特効薬はありません。慢性の病気や末期の患者を治すこともできません。しかしこの力を持つていれば、医師にできることはもっとあるはずです。

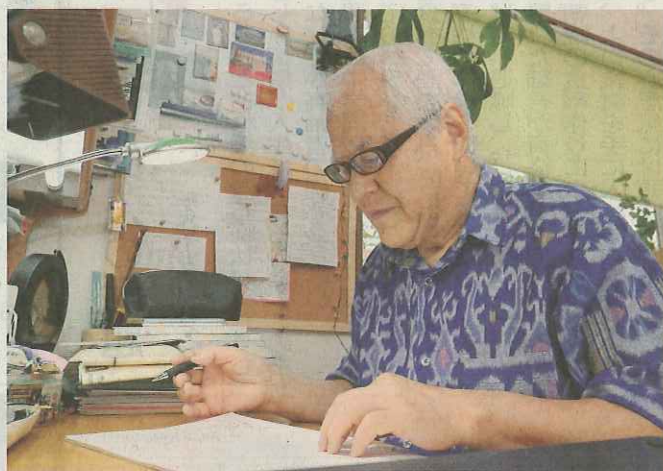
ことではなく、もっと奥深いもののはずです。学ぶほど、未知のことが増えていく。それでも向き合い続ける力こそ、大事なことだと思えます。

### 安易な結論を出さず耐える力が支えに

場面で必要になるという。

2017年に「ネガティブ・ケイ・パビリティ」という本を出したところ、医療界だけでなく、学校の先生から多くの反響がありました。

「ネガティブ・ケイ・パビリティ」という本を出したところ、医療界だけでなく、学校の先生から多くの反響がありました。すぐには解決できなくても、持ちこたえること自体が能力だと思えば、教師も子どもたちももっと自信が持てるのではないのでしょうか。学びとは、すぐに答えを出す



自分だからこそ書けるテーマに挑み続ける

これからも医師を続けながら、自分だからこそ書ける、書かなければならないテーマを書き続けます。(編集委員 辻本浩子が担当しました)